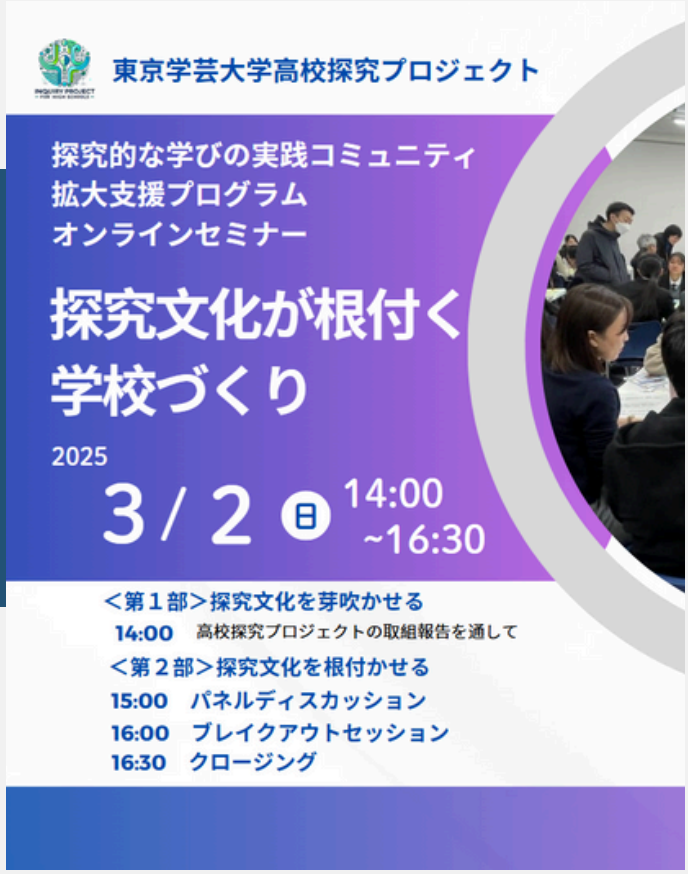
東京学芸大学高校探究プロジェクト

Vol.44, MAR 2025.

Let's TANQ便り

「探究的な学びの実践コミュニティ」拡大に向けたニュースレター



楽しく，生徒と共創的に，どのように「学びの場を」つくるか

続いて，本プロジェクトの西村リーダーから本セミナーの趣旨が説明されました。

今まで**「楽」**をキーワードに活動してきました。それは，**「たのしみながらやる」という意味**です。探究を，生徒だけでなく教員にとっても「難しくて敷居が高いもの」ではなく，**「ワクワクしながら共に創るもの」**にしたいと取り組んできました。

教育は目的依存です。日々の忙しさに追われる中で，視座が低くなり，手段であるはずの探究が「目的化」してしまってはいないでしょうか。

本日のセミナーを通して，もう一度，視座を高くして，目の前の生徒に必要な学びは何なのかを，何が目標・目的なのかを自問しつつ，**教科における探究的な学びと総探・教科横断の探究の双方を，学校に根付かせていくにはどうしたらよいか**を一緒に考えましょう。

3月2日「探究文化が根付く学校づくり」オンラインセミナー開催！！

「高校探究プロジェクト」は，2021年4月から3カ年の活動を通じて，学校や地域を越えたコミュニティの創出・拡大を実感する一方で，各学校に探究文化を根付かせていくことの重要性を改めて認識しました。そこで，2024年度からは**「探究的な学びの実践コミュニティの拡大支援プログラム」の開発**に取り組んでおります。その初年度の締めくくりとして，本オンラインセミナーを開催しました。

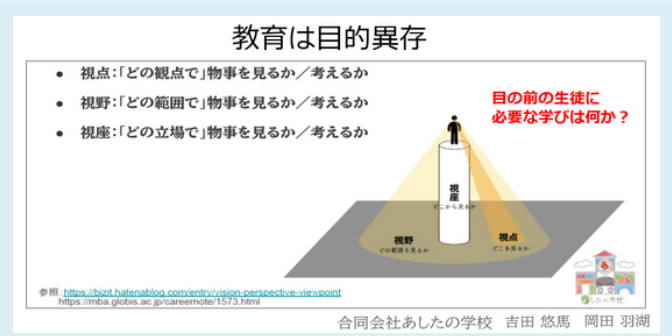
高校生を含むさまざまな立場の方々，約300名からお申込みをいただき当日を迎えました。

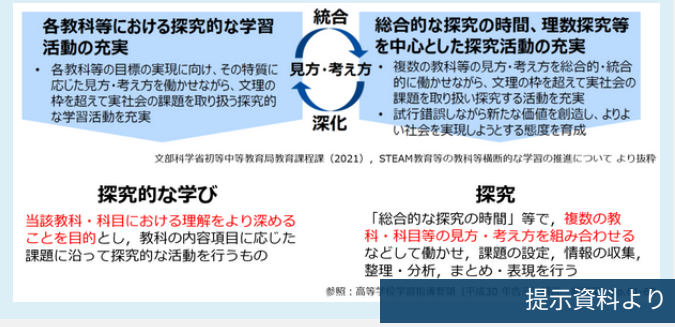
オープニングでは，参加申込をしてくれた大学生・高校生の声を紹介しました。

・中高では探究活動をしてきました。そこでは，**私の探究を先生のたてる道筋に沿うような形に修正しその中でやりたい活動をしていました。この制限された探究活動は本当に探究なの？？**って思うことがあったのでおもしろそうなWSだと申し込みました。

・今現在，学校で探究活動をしているのですが，**“探究の授業！”というより論文の授業に近くあまり探究活動をしているという自覚が持てずにいた**ので，このWSに参加して実際の探究活動について知りたいと思った。

このような声を共有し，本セミナーをスタートしました。

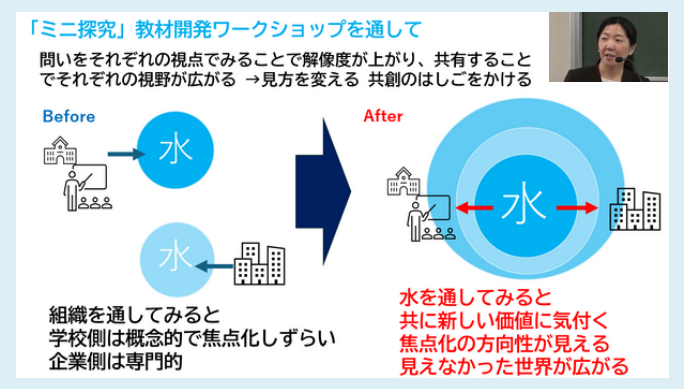




提示資料より

＜第１部＞探究文化を芽吹かせる ～高校探究プロジェクトの取組報告を通して～

○「ミニ探究」教材開発ワークショップ



一般社団法人産業環境管理協会
資源・リサイクル促進センター　向中野 裕子 氏

「『ミニ探究』教材開発ワークショップ」（全３回）において，「環境・リサイクル」をテーマに教科横断型の教材開発に取り組んだAチームの様子について，アドバイザーの向中野さんからご報告いただきました。

初めは，教科の視点から問いを考えようとしたが，知識が少なく，解像度が低いため難しさを感じた。しかし，**テーマに関するキーワードを挙げてみると次々に単語が出てくる面白さを実感。その流れの中で問いを生み出すことができた。**さらに，小さな問いを分類しながら対話を進めていくと，「水とどう付き合うか？」という大きな問いが生まれ，教科横断の授業デザインにつながった。キーワードを共有することで，教科間のつながりや多様な価値を認識しやすくなり，教科ごとの問いを考えやすくなった。このプロセスを振り返ると，**探究において重要なのは，手段ではなく目的を共有することであり，何より「楽しむこと」が大切である**と実感できた。

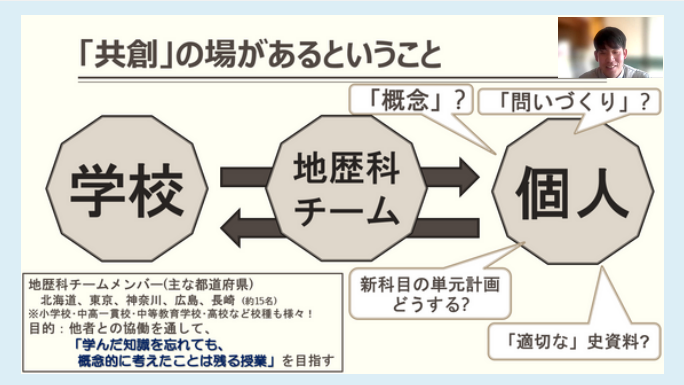
○数学科授業研究ワークショップ

教科における探究的な学びでは，プロセスとプロダクトの両方が重要であることを確認した後，工藤先生より，最近の授業で感じている探究文化の芽生えについて，生徒の様子とともにご紹介いただきました。

授業研究を通して，単元の構成を見直すことで，生徒に残る学びを生み出せる改善点に気づけた。種蒔きから芽生えを考えたとき，授業で水やりの期間が重要だと実感している。そのためには，今回のように**教員が協働して，試行錯誤しながら定期的に取り組むことが大切で，単元を通して何を残したいのか，生徒の素朴な発言を大事にしながら地道に取り組みたい。**数学を学ぶことの価値を高め，単に問題が解けること以上の意義を教員間で共有したい。**授業は生徒と教師が共に創りあげていくもの**で，そうすることで探究的な学びの実現につながるのではないか。

数学科授業研究Aチームメンバー（研究授業授業者）
青森県立木造高等学校　教諭　工藤 祐輔 先生

○地歴科授業研究ワークショップ



地歴科授業研究チームメンバー（研究授業授業者）
長崎県立宇久高等学校　教諭　小林 詳梧 先生

長崎県五島列島の最北端にある宇久高校（全校生徒8名）の小林先生から，地歴科チームの目的や活動の様子，検討会で大切にしている視点（前回の協議会の内容がどのように生かされているか，また授業研究のサイクルがその後の授業にどう影響を与えたか）などをご報告いただきました。

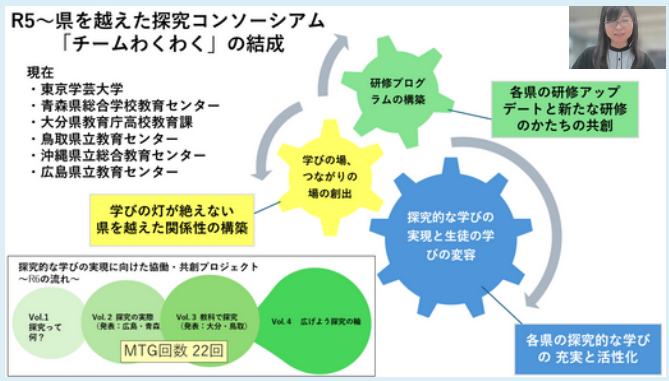
授業研究を通じて，より客観的に自身の授業観や授業を考え，研究授業以外の「普段の授業」の重要性を改めて実感した。チームメンバーとの対話が何より楽しく，**新しいことに挑戦するワクワク感を共有できる場で，前向きなサイクルが生まれている。**校内に探究文化を根付かせるために，**理念を共有する場をつくり，教科における探究的な学びを考え，さらに，その先に総探がつながっている**ことを認識させたい。他教科の内容まではわからないけれど，探究の視点からならば議論できる。「探究」を共通項とした学校づくりに取り組みたい。

○わくわくメンバーによる地域を越えた協働・共創型研修

「チームわくわく」の生みの親である長野先生から，2022年に広島･青森･大分で始まった取り組みが，昨年度は鳥取，今年度は沖縄へと広がったことが語られました。

チームわくわくの目的は右図の青い歯車に示される部分だが，私たちは特に黄色と緑色を大切にし，それが**心に灯をともす原動力**となっている。研修は全4回で，各回ごとに異なる県が主担当になり，事前・振り返りMTGをオンラインで重ねた。その回数は22回。この回数をどう感じるかは，わくわく度合いによるのではないか。回を重ねる中で，クリティカルな視点や新たなアイデアが生まれ，研修デザインの質も向上しました。あわせて，研修内容も充実し，参加者の満足度も高まっている。

勇気をだして「やりたい」と声を上げたことで，賛同してくれる仲間と出会い，壁を壁と感じずに挑戦を続けてこれた。次年度で3年目となる研修も，自分たちも探究し，さらにアップデートし続けたい。



わくわくメンバー（チームわくわくの生みの親）
広島県教育委員会　指導主事　長野 真美 氏
※チャットもわくわくメンバーからコメントで賑わいました

＜第２部＞ 探究文化を根付かせる ～パネルディスカッション～

どのようにしたら，自分の学校に「変化」を起こすことができるか？

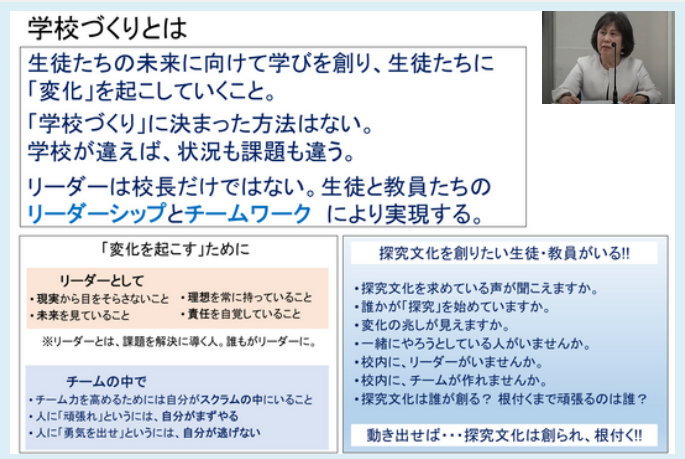
西村リーダー：元文部科学省主任視学官の長尾先生にお伺いします。高校の現状で探究文化は根付いている状況にあるのでしょうか？もし根付いていないとすれば，どういうところが壁になっているのでしょうか？

長尾先生：探究文化はまだ十分に根付いているとは言えず，その壁として，大学受験や基礎学力の定着が優先される授業の現状と探究に対する教師の温度差があると考えています。探究文化を根付かせるための改革は，全学校に共通する方法はなく，各校がこれまでの取り組みを踏まえて独自の改革を進めることが重要です。時間はかかりますが，学校全体で取り組むことが必要で，**生徒の変容が見えると探究の時間に対して肯定的・積極的な姿勢をもつ教員が増えてきた**という報告もあります。

栗原先生：今お話を聞いていて学校にはそれぞれの伝統があるので，変化を嫌う体質もあることを感じました。今日は，**「どうすれば自分の学校に変化を起こせるのか」**という広い視点で，これまで校長として勤務した学校での実践をもとにお話しします。

まず，生徒や先生の声を聞き，課題を把握することから始めました。「人に頑張れと言うからには，まず自分ができることを片っ端からやってみる」そう決めて行動しました。当初は孤独を感じましたが，「このままでいいのか」「自分はどう生きたいのか」と問い続けるうちに，**生徒に変化の兆しが見え始めました。すると、教員も動き出し，学校全体に変容が生まれ、見える景色が変わっていきました。**この変化の本質は，数字では測れないものであり，生徒が「自分で考える」ことから生じたものでした。**自分の考えや変化を自分の言葉で語る場をつくることで，生徒は自己を肯定し，前向きに生きるようになり，新しい学校文化が生まれた**と感じています。

私は，「学校づくりとは，目の前の生徒たちの未来に向け，新しい学びを生み出し，変化を起こすこと」だと考えています。そして、「リーダーとは、課題を解決に導く人」です。今日，**探究文化を創りたいと願う生徒・教員・未来の教員が参加してくれていることを嬉しく思い，みなさんが，誰かとともに，あるいは外部とつながりながら，学校に変化を生み出していくことを期待しています。**



西村リーダー：第１部でも，生徒をしっかり見ましょうと語っていただきましたが，そこをうまくつなげていくことがリーダーに課せられているわけですが，栗原先生のように，**生徒や先生方を巻き込みながら，楽しみながらやっていくことが大事**ですね。

「探究文化」とは？「文化が根付く」とは？「学校づくり」とは？

OECD教育スキル局シニア政策アナリストの田熊美保氏から，本セミナーのテーマ「探究文化が根付く学校づくり」を3つの視点に分解し，プロジェクトマネージャーとして携わるOECD Education 2040からヒントをご紹介いただきました。

「探究文化」とは？

探究活動ではなく，「探究文化」として根付かせることが重要で，そのための**足腰の柔軟性として，「教科の見方・考え方」「教科横断（融合）」が大切**です。

生徒の着想・素朴な疑問を「大きな問い・本質的な問い」へとつなげている問い立ての重要性が強調され，同じ問いを異なる教科から問うてみるイングランドの事例や，環境と持続可能な開発をテーマにした教科横断カリキュラムとして，同じ森を異なる教科の先生と散歩するエストニアの事例をご紹介いただきました。

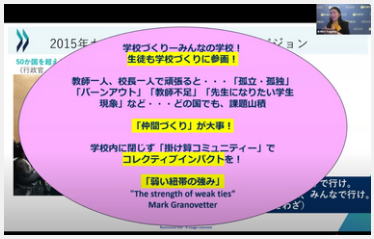
◆他国の事例（盲点・落とし穴）からの３つの示唆
①「見方･考え方」を，「探究」を，「教科横断」を「教えて」しまう。手法ではなく根本にある「文化・価値観」のアップデートを！
②「問い立て」自体を先生がつくりこんでしまう。生徒の着想･素朴な疑問を引き出し，良質な問い立てをする力量を！
③それって「教科横断」？　生徒も教師もワクワクする「大きな問い・本質的な問い」に立ち戻ろう！

「文化が根付く」とは？

日本OECD共同研究プロジェクトは，東日本大震災を契機に始まり今年で14年目です。**参加者から，「1日ではイベント 1年続けば取り組み 10年続けば歴史となり 30年積み重なれば文化になる」**という言葉が寄せられました。エストニアでは，教科横断などカリキュラム実施が定着していますが，「一人ひとりが考えることが大切」という揺るがない価値観が根っこにあります。**文化を定着させるためには，「焦らない 急がない 揺るがない」**ことが何より重要です。

「学校づくり」とは？

そもそも，**何のための学校？誰のための学校？誰が学校をつくるの？という問い**から，考える必要があるということで，2015年から10年間，50か国を超える国から多様な価値観を持つメンバーと**わちゃわちゃ対話**をし続けています。OECDがビジョンを決めてしまえば早いのかもしれないけれど，文化を根付かせるには，生徒を含めたみんなでつくることが大事だという考えからスタートしました。



学校づくりには，生徒の参画と仲間づくりが重要。先生にとって，第三の居場所となるコミュニティの存在が強み。こういう環境を大切にしながら，一緒に進んでいければと考えています。

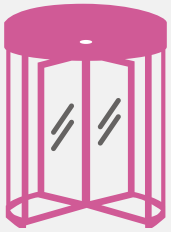
生徒の「探究の芽」を見逃していないか

パネルディスカッションを受けて，**「探究の『種』をどのようにまき，どのように育んでいくか」**をテーマに，地域や立場を越えたメンバーで，ブレイクアウトセッションを設定しました。

それを受けて，高校探究プロジェクトの日高サブリーダーが2000年の朝日新聞に掲載された短歌「目標を見つけることが目標になってしまった18の今」を引用し，現在の高校生がこの歌をどのように感じるのかを問いかけました。

探究活動を通じて自分のやりたいことを明確に話せる生徒もいれば，与えられた枠組みの中で「自分の探究ではなかった」と感じている生徒もいるかもしれません。私たちは，**探究の種をまくだけでなく，生徒の中にすでに存在する探究の芽を見いだし，どのように育てていくかを考える必要**もあります。本プロジェクトは，ご参加いただいた先生方からいろいろな形で学びながら，全国の先生方をつなぐハブとしての役割も担い，次年度以降も新たな展開を模索していきたいと考えています。

セミナーの締めくくりとして，西村リーダーは「楽しみながら共創し，探究の芽を育む」ことの大切さを強調しました。



「探究文化を根付かせる」と聞くと壁やハードルを感じがちですが，「壁を越える」のではなく，回転扉のように「壁をかわしていく」方法もあると提案し，**多様な道筋がある中，自分の学校に合った形で，探究文化を育てていくことが重要**だと考えています。

今日は「水やりをする」という言葉もでてきましたが，探究の芽を育てることを楽しめば，やがて大きな木となります。みんなで取り組むことで，かつて高く見えた壁も「思ったより低かった」と感じられるようになるかもしれません。一度経験すれば「なんてことはなかった」と思えるようになり，それが受け継がれていくことで，学校文化となっていくのではないでしょうか。

最後に，**「力を合わせて種をまき，芽を育て，やがて大きな木にしていきましょう」**と，クロージングとしました。

配信会場の様子

参加者からのコメント

・探究文化を学校に広めるための課題として，時間不足や先生の意識の違いなどが話されました。それを受けて，**探究活動では，教科を越えた問いを考え，深い学びを目指すことが大切だ**と感じました。高校生としても受験のための授業よりも，日常や他教科と関連した柔軟性のある授業の方が楽しいと感じます。また，先生の方から全て提供されるのではなく，**生徒が自主的に取り組めるような授業も探究文化を広めてくために必要だ**と考えました。（高校生）

・パネルディスカッションでは他教科との横断的な学習や行動力の大切さについて学びました。その中で，どのように探究を深めていくのか，自分の探究についての考えをまとめることができました。今回学んだ「本質的な問い」を考えて、今後の探究活動が有意義なものになるように生かしていきたいです。（高校生）

・**「誰のための学校か」という視点は大変重要**だと改めて感じました。生徒の考えや思いを汲み取りつつ，一方で生徒の主体性・当事者意識も引き出しつつ授業や学校づくりをしていく必要性を感じました。そうすることで真の生徒の変容が起き，「文化・価値観」のアップデートも可能になるのだろうと感じました。（高校教員）

・まず自ら種をまきながら（芽を出している生徒を見取りながら），生徒と向き合うなかで，少しずつ生徒が変容していく過程で，他の先生方と一緒に共創する場を粘り強く（一方で気楽に）つくっていくことが重要なのだろうと感じました。（高校教員）

・学校現場に「探究」を根付かせていくには，**時間と忍耐が必要**だと改めて感じました。そうした中で，西村先生が提唱された**「楽」の姿勢は，まさに取り組みへの原動力**となるアプローチだと感じました。（指導主事）

・今回の発表を聴いて，多くの高校で「探究」や「探究的な学び」にチャレンジして，仲間も増えているとともに，探究を学校に根付かせていく活動の広がりを感じました。生徒の変化が先生の意識を変え、先生同士のつながりが先生の行動を変えていると思います。（一般）

3/27開催「年度開きに向けたリーダー･ファシリテーターのためのワークショップ2025」

ポジティブ・アプローチという手法を取り入れた「ビジョン共有のための教員研修プログラム」をミニ体験しませんか。**ファシリテーターとしてのポイントや資料の活用方法**などをお伝えします。

本ワークショップは２年ぶりの開催となります。学級経営や部活指導等にも活用できますので，実践紹介をもとに，交流する場も設定したいと考えています。

日時：2025年3月27日（木）19：00～20：30
形態：Zoomによるオンライン開催
※資料の共有あり（即活用可能）　※参加無料
※参加申込フォーム　https://forms.gle/Uqa3vykcv3ZJVh6DA

〒184-8501
東京都小金井市貫井北町4-1-1　東京学芸大学 高校探究プロジェクト
TEL：042-329-7927　E-Mail：g-tanq@ml.u-gakugei.ac.jp　URL：https://g-tanq.jp/